

李 和珍 提出 学位申請論文

『グローバル時代における日韓の近代新宗教の展開

—妙智會教団と圓佛教の事例を中心に—』 審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は、日本の仏教系新宗教である妙智會教団（以下、妙智會）と韓国のやはり仏教系新宗教である圓佛教のとくに 1980 年代以降の展開に焦点を当て、グローバル化が進み、情報化が進行する中に教団の活動や信者の意識にどのような変化が観察されるかを、文献研究、面談調査、アンケート調査という大きく 3 つの方法によって調査し、分析したものである。

2 つの教団は形成された時期が圓佛教の場合は 20 世紀前半、妙智會の場合は 20 世紀中ごろと比較的近く、また教団の規模も公称信者数では数十万人と比較的似ている。どちらも仏教系であり、先祖供養を重視するなど、教義に似た点もいくつかある。両教団を近代新宗教として位置付けた上で、グローバル化や情報化が教団に与えている影響を考察すると同時に、日本と韓国の社会状況の違いが宗教活動の展開にどう関わっているかを考察している。とくに妙智會の信者 2,486 人、圓佛教の信者 1,252 人に対して行われたかなり規模の大きいアンケート調査結果が分析されているが、日韓の教団に対して同様の視点からなされたこうしたアンケートは他に類がなく、きわめて貴重なデータを提供している。

本論文は、序論以下3部に分かれる。第I部が3章、第II部が3章、第III部が3章からなり、これに終章が付されるという構成になっている。末尾には妙智會の信者に対するアンケート調査の質問内容と、圓佛教の信者に対する韓国語のアンケート調査の質問内容が記されている。

序論において、本論文の目的と構成とを示している。とくにグローバル化が進行する時期の両教団の活動を比較することを主眼とした理由を明らかにしている。

「第I部 妙智會の形成とグローバル時代の展開」の「第1章 妙智會に関する研究史 ―宗教社会学的視点を中心に―」においては、妙智會の概要を示すと同時に、先行研究について考察を行っている。妙智會は靈友会から1950年に分派し、宮本ミツを会主として、新たな組織を作った。ミツの没後、娘婿の宮本文靖、文靖の息子の恵司と継承された教団指導者の活動方針等についても、教団資料を踏まえて概略を示している。

妙智會についての先行研究を紹介し、本論文はそれまでの研究で扱われた時期以後の最近に至るまでの状況が主たる対象であることを述べている。教団刊行物を教祖伝、定期刊行物などに分けて整理して、その内容を紹介している。教団刊行物の特徴として、教祖に関する文献が多いこと、信者の体験談を重視していること、教学研究にはあまり力が注がれていないことの3つを挙げている。また関連の統計資料も踏まえながら現代に至る教団の展開をおさえている。

「第2章 グローバル化時代の到来と新宗教妙智會教団の展開 ―機

関紙・誌の分析を中心に―」においては、教団刊行物の内容から、妙智會がどのような人たちや団体とつながりを形成してきたかについて分析している。政治家とのつながりも多いが、社会活動に関しては新日本宗教団体連合会（新宗連）の加盟教団として活動したことで、基本的な活動の路線ができたことを指摘している。そして国際活動を展開するに際して 1990 年に設立された「ありがとう基金」が重要な機能を果たしているとし、その活動について会員にどのような点を強調して広報してきたかを分析している。

「第 3 章 「ありがとうインターナショナル」の理念とその展開」においては、「ありがとう基金」が 2012 年に一般財団法人「ありがとうインターナショナル」となり、国際活動が一段と広く展開され、国連機関やその他の NGO と連携していくようになったとする。ここに妙智會のグローバル化時代の対応の特徴が見られるとしている。海外布教に力点を置くのではなく、国際的な機関との協力に力を入れるというやり方であるとする。

「第 II 部 圓佛教の形成とグローバル時代への対応」の「第 1 章 圓佛教の現況と研究の動向 ―宗教社会学的視点から―」においては、創設以来の圓佛教の歴史、組織の概要、基本的な教理、主たる儀式と修行、教団施設と関連機関、そして布教現況などを概括した上で、圓佛教についての先行研究史をまとめている。圓佛教は 1916 年に少太山（朴重彬）によって韓国で設立された仏教系の教団である。1943 年の少太山の死後、圓佛教の教えは「宗法師」により継承され、現在までに 5 人の宗法

師がいる。これらの歴史や活動の概要については、主に韓国語文献を参考にして論じている。

「第2章 圓佛教の日本布教と現況」においては、圓佛教の日本布教の歴史と現況をまとめている。圓佛教の宗教施設は教堂と呼ばれるが、日本の教堂に集まる信者はほとんどが韓国人あるいは韓国系の人たちである。面談調査や参与観察によって得られた結果に基づいて、日本人信者があまりいない理由について考察している。

「第3章 圓佛教の海外布教の日米比較 —「圓佛教新聞」の記事分析—」においては、機関紙『圓佛教新聞』に掲載された記事を分析して、圓佛教の海外布教について考察する。韓国外でもっとも多くの教堂及び関連施設が設立されている米国と日本の布教活動とを比較し、日本における教堂や日本人信者が少ない理由を考察している。仏教的な近代新宗教が米国では禅仏教の広がりがあるように受け入れられる素地があるが、日本の場合は仏教系の近代新宗教が数多くあり、禅仏教も広まっているので、圓佛教は受け入れられる余地があまりなかったと分析している。

「第Ⅲ部 グローバル時代における近代新宗教の展開の日韓比較 —アンケート結果を中心に—」の「第1章 情報化時代における妙智會会員の意識」においては、2006年～2007年に妙智會の会員2,486人を対象に行ったアンケート調査の結果を分析している。会員の先祖供養に対する考えが世代間でどう異なるか、情報化時代の変化に会員の対応がどの程度意識化されているのかなどについて世代間の差に焦点を置いて考

察している。

「第2章 情報化時代における圓佛教教徒の意識 ―教徒へのアンケート調査の分析を中心に―」においては、2008~2009年に行った圓佛教の教徒1,252人を対象にしたアンケート調査の結果を分析している。教徒の信仰生活と教理、教団に対する考えを、世代間の差に焦点を置いて考察している。

「第3章 妙智會と圓佛教の意識調査の比較」においては、妙智會と圓佛教の信者を対象にして行ったアンケート調査のうち、とくに先祖祭祀に関する質問、及び情報化への対応に関する質問についての回答結果について注目しながら、両教団を比較し、共通点と異なる点を分析し、その理由について考察している。

「終章」では、妙智會と圓佛教のグローバル時代への対応の特徴をまとめている。妙智會も圓佛教も、教団の基礎が固まってくるのは、1950年代から60年代にかけてであり、教えや活動のあり方もその時期の社会状況に大きな影響を受けたとする。また両教団における信者の高齢化の傾向が、グローバル化への対応をやや鈍くしている面は共通性があると分析する。情報化に関しては圓佛教がインターネット上の情報を多様に発信するなど、妙智會だけでなく日本の他の近代新宗教に比べても進んでいる面がある。これは韓国が21世紀になってすぐ、国家的に情報化を推進したことが影響していると考察している。

論文審査の結果の要旨

日本や韓国においては近代化の過程で近代新宗教と呼ばれるような新しい教団が19世紀から20世紀にかけて数多く形成された。そのうち、20世紀前半にその基盤ができた教団は、20世紀末から21世紀初めにかけては、指導者や信者の世代更新が進んだ。リーダーが変わると同時に、信者も最初に入信したいわゆる1世信者は少なくなり、親が信者であったという2世信者、さらにその子どもの世代の3世信者が大半を占めるようになる。この時期はグローバル化や情報化が急速に進行する時期である。

本論文で扱われている妙智會と圓佛教は、こうした教団の典型例である。両教団とも仏教系であり、また信者規模は新宗教の中では中規模と言えるものである。本論文はこの2つの教団について、成立より半世紀以上が経過した新宗教がグローバル化の進行する時代にどのような活動を展開しているかを比較するだけでなく、同じ時期の日本と韓国の社会状況の違いを踏まえて論じているという点において、ほとんど類のない研究である。論文提出者の母語は韓国語であるが、日本語能力もきわめて高いゆえに可能になった研究と言える。

研究方法はオーソドックスであり、基礎となる教団資料と先行の研究文献を日本語、韓国語の双方において踏まえた上で、面談調査とアンケート調査を行っている。グローバル化や情報化がもたらす影響を分析するという視点が一貫しているので、アンケート調査の内容もそれに沿った

内容となっている。21世紀当初における教団の情報化への対応に対して信者たちがどのような考えや意見を持っていたかや、教団が設立以来行っている先祖祭祀のあり方に対する意見や評価がうかがえる貴重なデータを提供している。

妙智會はとくに1960年、70年代における活動については、若干の先行研究があるが、90年代以降の活動についての研究はきわめて少ない。本部における教団幹部、また都内の支部における教会長に対する面談調査の他、七面山修行、千葉県の聖地における修行にも加わって参与観察を行っている。こうした調査によって、多くの会員たちからさまざまな情報を得た上で、アンケート調査の結果も分析しているので、託送法というやや正確さにおいて問題を孕む方法をとっているものの、実情と乖離した分析にはなっていないと考えられる。会員の高齢化が進み、教団がインターネット上で発信する情報をあまり利用していないことが、回答結果から数値化されて議論されていることは大きな意味がある。

また圓佛教については、日本における宗教社会学的な研究はほぼ皆無と言っていいほどである。規模は比較的小さいものの、韓国では仏教、プロテスタント、カトリックとともに四大宗教とされており、社会的によく知られている。中学校、高等学校の他、圓光大学校という大学も設立している。しかし、韓国においても教学的な研究は一定程度あるとはいえ、宗教社会学的な研究となると少ないと言える。韓国における新宗教研究自体が、日本に比べると研究者の層が薄いこともその理由の一つである。こうした中に日本において蓄積されている新宗教についての宗

教社会学的な視点を採り入れて、圓佛教の資料や面談調査の結果から、21世紀における活動の特徴を分析したことは高く評価される。

圓佛教は2010年代後半になって、インターネット上に多くの資料やデータを公開するようになった。本論文執筆の途中にこれに気付き、これらから得られる情報も十分活用して、日本と韓国、さらには日本と米国における圓佛教の活動を分析した点も評価される。

両教団についての先行研究が必ずしも多くはないので、基本的な事柄を確認するのに多くの努力を費やす必要があったと思われるが、丹念に資料を収集し、それらを細かく整理分析しているので、今後の両教団の研究に大いに資すると評価できる。

ただアンケートの実施が2000年代半ばであり、致し方ないとはいえ、2010年代における展開と突き合わせる場合に、多少のズレが生じている。論文執筆期間が長かったことも、このズレをいくぶん大きくしている。21世紀において、グローバル化、情報化の進行は加速化している傾向にあるので、こうした現代宗教の分析は以前にもまして困難さを抱えている。こうした点を整理するには、21世紀におけるグローバル化や情報化の進行と、それらが宗教活動に与えている影響について、さらに細かく時期を分けて分析する必要も出てきている。これは今後の課題として提示しておきたい。

そうした課題点はあるものの、本論文はよく考えられた対象の設定の上に、着実な研究方法によって、日韓の2つの教団のグローバル時代における活動の変容や、それに対する支部長などローカルな指導者や信者

たちの意識について分析しており、今後の日本及び韓国の新宗教研究に資するところが大きい研究と言える。

以上の審査結果によって、本論文の提出者李和珍は、博士（宗教学）の学位を授与せられる資格があると認める。

令和元年 12 月 2 日

| | | | |
|----|---------------|---------|---|
| 主査 | 國學院大學大学院客員教授 | 井 上 順 孝 | ㊟ |
| 副査 | 國 學 院 大 學 教 授 | 遠 藤 潤 | ㊟ |
| 副査 | 國 學 院 大 學 教 授 | 黒 崎 浩 行 | ㊟ |

李 和珍 学力確認の結果の要旨

下記3名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、
博士（宗教学）の学位を授与される学力があることを確認した。

令和元年12月2日

学力確認担当者

主査 國學院大學大学院客員教授 井 上 順 孝 ㊞

副査 國 學 院 大 學 教 授 遠 藤 潤 ㊞

副査 國 學 院 大 學 教 授 黒 崎 浩 行 ㊞